

なぜ、日本は負けたのか ～太平洋戦争中の日本と現代の日本の共通点とは～

3年2組 23班

① 研究要旨

私たちは太平洋戦争中の日本の問題点について調べ、そこから現代日本の問題との共通点について考察した。太平洋戦争で敗北した要因には、現代日本の政治の諸問題についても言えるものがあった。歴史から様々なことを学び、生かすことによって、より良い社会を築き上げることができるだろう。

② キーワード

政治の不安定 不適切な戦力投入 議論の不十分

② 序論

現代の国際情勢は絶え間なく変化し、様々な問題に揺れ動いている。日本がそんな国際社会を生き抜いていくためには、政府や国民が様々な問題に対して正しい判断を下していかなければならない。そこで私たちは、太平洋戦争で日本国がどうして正しい判断を下すことが出来なかったのか、そこにどのような社会状況があったのかということについて調べた。

④ 研究手法

どうして日本が戦争に負けたのか。その原因について三つの仮説を立て、それを主軸として、太平洋戦争中の日本の社会状況や、問題点について研究した。

仮説1. 他の国に比べて政治が不安定だった。

第二次世界大戦に参戦していた国で、日本のようにリーダーが何度も交代するという国は他には無い。そこで、そういった政治の不安定さが戦争に負けた原因なのか、日中戦争から太平洋戦争終了までの首相についてそれぞれ調べた。

{近衛文麿} 日中戦争(1937年6月7日)～1938年1月5日、1940年7月22日～太平洋戦争直前(1941年10月18日)



- ・軍人ではない。貴族院議長などの要職を歴任。
- ・盧溝橋事件の際、中国軍増派の報を受け軍部の圧力もあり、陸軍を新たに派遣するなどし、全面戦争へのレールを敷いてしまう。
- ・優柔不断で、弱気なところがあった。

{東条英機} 太平洋戦争直前(1941年10月18日)～

サイパン島陥落(1944年7月22日) 陸軍出身



- ・関東軍参謀長や陸軍次官を歴任。
- ・当時の陸軍内の主流派の中心人物。
- ・アメリカに宣戦布告した首相として戦争に勝つと覚悟を決めていた。
- ・天皇への忠誠心がだれよりも高かった。
- ・カリスマ性は皆無で完全な努力型で勉強家だが視野が狭く、人事も自分好み。

{小磯國昭} サイパン島陥落 (1944年7月22日) ~1945年4月7日



- ・陸軍の主流派ではなかった。
- ・予備役のままなので大本營の會議に出ることが出来なかった。
- ・フィリピン方面で決戦を行おうとするも失敗。
- ・中国との単独講和を模索したが反対派が多数で断念した。
- ・指導力に定評があったものの、首相就任後は振るわず。

{鈴木貫太郎} 1945年4月7日~終戦 (1945年8月17日) 海軍出身



- ・和平派。
- ・昭和天皇の信任が厚く、侍従長などを歴任。
- ・強硬派 (戦争継続派) の圧力に屈してポツダム宣言を「黙殺」すると発表し、これが連合国側に「拒否」と受け取られてしまう。
- ・穏やかで実直であった。

{東久邇宮稔彦} 終戦 (1945年8月17日) ~1945年10月9日 陸軍出身



- ・自由主義思想の持ち主
- ・戦争反対派
- ・終戦後からのGHQの内政干渉に抵抗して首相を辞職
- ・社交的であった。また、外国文化に知見が深かった。

○調べた結果、5人の首相が太平洋戦争にかかわった。この5人という数は第二次世界大戦に参加した主な国の中で最多である。これでは、お世辞にも首相に指導力・統率力があつたとはいえない。戦勝国はアメリカを除いて戦争中の最高指導者は一人である。(アメリカは死亡交代により二人。)

仮説2. 不適切な戦力投入

日本が戦争で負けた理由に、戦力差がよく挙げられるが私たちは少ない戦力を有効に活用できなかったのではないかと考え調べた。

その1 敵情把握の不十分であった例

- ・ガダルカナル島の戦い (1942年8月7日~1943年2月7日)

1. 現地兵力 海軍第84警備隊はじめ、約3000名 (その後壊滅)
2. 米軍は第1海兵師団1万名強が上陸、米軍上陸の報を受け、陸軍は急きょ増派を決定。一木支隊を送った。一木支隊は『ガ島の米軍兵力は、1個連隊程度』という大本營の甘すぎる情勢判断のもと、先遣隊約900名で攻撃を開始。しかし、10倍以上の戦力差に圧倒され、全滅に近い被害を受ける。
3. 一木支隊敗北の報に慌てて、増派を決定。歩兵第35旅団・第124連隊を基幹とする約4000名の川口支隊を送る。だが、この時点でも、米軍兵力を過小評価していた。川口支隊は一時米軍を押し戻すも、米軍にも増援が来たことなどにより、結局壊滅。

ガ島参加兵力

	日本軍	米軍
総兵力	916	10900
戦死	777	34
戦傷	30	75

4. 同支隊の壊滅に驚いた陸軍は第3次増派を決定。第二師団の約2万名を送りこみ、総攻撃を企図するが、ジャングルの悪路の影響で補給物資や重火器が届かず苦戦し、失敗。その後も増援を送るなどするが戦況は好転せず撤退までに戦死・餓死合わせて約21500名を出した。

その3 戦力の配置に失敗した例

空母航空隊の転用

・「い」号作戦（1943年思4月7日～4月14日）

1. 陸上基地の航空隊が消耗していたため、第三艦隊の第一・第二航空戦隊合計184機をラバウル航空基地に送った。
2. ソロモン諸島及びニューギニア東部への攻撃を実施、作戦は一応成功するも、期待したほどの戦果は上がり、この転用部隊は約30機を失い、損傷機を含めると6割を超える損害を出してしまい、回復するまでに約三か月を要した。
3. その結果、その間行われた作戦に第三艦隊を投入することが出来なかった。※機体の補てんにも時間を要したが、空母への着艦は陸上基地への着陸より難しいため、空母部隊のパイロットの育成に時間がかかった。

○調べた結果、やはり、日本軍の兵力運用には、適切とは言えない場合が複数あった。

仮説3. 作戦に関する議論の不十分

投入兵力を考えると、勝っていたはずなのに負けた戦いもあるため、作戦自体に問題があったのではないかと考え、調べた。

その1 図上演習のずさんさ

・ミッドウェー海戦（1942年6月5日～6月7日）

1. 作戦立案後作戦参加予定の指揮官を中心に図上演習が行われたが損害大の結果が出た。
2. しかし、作戦の中止・変更の意見は連合艦隊司令長官・山本五十六や連合艦隊参謀黒島亀人らの、原案で行きたいという意味ですべて却下され、作戦が実行されてしまった結果、空母4隻・航空機及びパイロット多数を失う大敗北を喫した。

その2 陸軍・海軍の意思疎通の拙さ

・捷号作戦(1944年7月～1945年1月)

1. 連合軍に最後の打撃を与えるべく陸海協同で作戦会議が行われたが双方が自身の主張を変えず、作戦の成立がもたつき、実行準備期間が圧迫されてしまった。
2. 台湾沖航空戦・レイテ沖海戦の大敗北で作戦は破たんした。

○やはり、日本軍の作戦には大きな問題があった。

⑤結果・考察

1. 私達が立てた3つの仮説はすべて正しかった。また、日本陸海軍上層部の醜態を目の当たりにした。そこで、なぜ彼らがこのような状態であったのか、またなぜ特攻などの作戦を実施してまで戦争を続けたのかを、以下のように考察した。

・緒戦の連勝で、「次も負けずに、勝てるだろう。」と気が緩んでしまった。

→作戦の甘さや、敵情把握のつたなさ

・このまま終わるわけにはいかないというプライドがあった。

→大戦中盤以降、劣勢に立たされ、負け戦さ続きでも軍上層部の多くは、連合軍に大きな打撃を与える(決戦を行う)まで何としても戦うという考えであった。《実際は兵員の質もモノの質も落ちており、量の差はどうしようもないくらいであったので、それはほぼ不可能であった。》つまり、現実が見えていなかったと言える。

・「大和魂」や「神風」など精神論にすり替えた

→精神論で戦力差を埋めようとするのは、非現実的であり単純におかしい。

2. また、この戦争の失敗を、現代の政治に生かすため、以下のことを考察した。

・政治家たちは、選挙の時には高らかにマニフェストを唱えるが、政権を獲るとそれにしがみついたために政策が迷走することがよくある。これは、戦中つまらないプライドを見せ、また劣勢にも拘わらず戦争末期まで自分たちの利益のために陸海軍が対立したり、時には内部ですら足並みがそろっていなかった太平洋戦争中の政治家や軍上層部と似ている。私達はそんなことのために投票するわけではないので、当然のことであるが、現代の政治家たちは自分の身のことでなく国民を第一に考えて政治を行うべきである。

・当時、現実を見ることができたはずなのに見ていなかったのは政治家や軍の上層部である。しかし、現在は私たち有権者が現実から目を背けてしまい、見ようとしていない。日本では戦後は国が大混乱に陥ることはなかったの、「任せておけばいい」感じがあるのかもしれないが、そうってしまうのは、政治家の思うつぼであるとする。ネットやテレビ、新聞などで積極的に情報を集め、毎回選挙へ行く等、自ら主体的に政治に参加するのが私たち有権者の務めである。そして、視野が広く、状況を的確・迅速に判断でき、意思を周りに左右されず、常に国民を第一に考えられる政治家を選ぶことが、激動の現代の中、この国を正しい方向へ導くことのできるリーダーを生み出すことになるのである。

⑥結論・展望

先の時代に私たち日本人が戦争をし、沢山のものを失ったという失敗をただの歴史、過去として受け取っているだけでは、国も私たちも本当の意味で成長することはできないのではないだろうか。 私たちが今回研究した内容の他にも、歴史上には現代の問題と共通点を持つものは沢山ある。そのような出来事から学び、生かしていくことでよりよい社会を築いていきたい。

⑦参考文献

1 歴史群像シリーズ[決定版]太平洋戦争 5 ソロモン・東部ニューギニアの死闘 土屋俊介著 学研パブリッシング 2009 1210 2 同 6 「絶対国防圏」の攻防 2010 0310 3 オール図解 30分で分かる太平洋戦争 太平洋戦争研究会著 日本文芸社 2005 0729 4 すべてわかる図解太平洋戦争地図と写真で読む日米決戦の全貌 世界情勢を読む会著 日本文芸社 2013 0710 5 人物・事件で分かる太平洋戦争 太平洋戦争研究会著 日本文芸社